

# 巻頭言

## 協同労働とは仲間を守ることと見つけたり

協同総合研究所 顧問 富沢 賢治

### はじめに

「全国よい仕事研究交流集会2016」は、「市民の手、市民の主体的力による新しい地域、新しい社会づくりは可能か——協同労働・社会連帯による地域からの新しい生活・文化運動の創造へ」をテーマとして開催された。

基調提起の報告では田中羊子さんが、労働運動の到達点として、「住民自身が協同労働で社会連帯、仕事おこしに取り組み、人と人がつながりあえる地域をつくる。そんな協同労働の地域化が始まった」という点を強調した。これを受けて、「まとめ」報告では永戸祐三さんが、「協同労働を地域化する」「市民連帯で地域をつくる」ことが「今の私たちの基調的な問いである」と確認した。

今日ワーカーズコープは、まさに「協同労働の地域化」を共通のスローガンとして運動を進めている。「協同労働の地域化」は集会のテーマを簡潔に表すよい表現だと感じた。

私は第19分散会にコメンテーターとして参加した。本稿では、当日のコメントをすこし膨らませて、「協同労働」と「地域社会」という2つのキーワードを中心に、いくつかの感想を述べたい。

### 協同労働とは仲間を守ることと見つけたり

第19分散会では4つの事業所の報告(亶理事業所、みさと事業所、杉並地域福祉事業所、福祉の杜とくら)がなされた。いずれの報告も、協同労働の汗と涙の実態を具体的に述べるものであり、感動に満ちたものであった。

なぜ皆はこれほど苦勞しながら働けるのであろうか。私は考えた。一人ではとても続けられない。仲間がいるから、仲間の励ましがあるから、頑張れるのであろうと。

しかし、さらに考えをすすめると、仲間とともに働くだけでは、働き続けるための理由としては弱い。頑張って働き続けるためには、もっと積極的な理由があるはずだ。その理由をはっきりと示してくれたのは、亶理事業所の池田道明所長の、つぎのような報告であった(詳細は日本労協新聞、2016年3月25日)。

亶理事業所は、2011年3月の東日本大震災の1年後の2012年3月に、震災地域復興事業の一環として宮城県の亶理町に設立され、産直、厨房、農園の仕事に順次取り組んでいった。しかし、2015年3月末で緊急

雇用事業が切れてからは、経営状況が悪化し続けた。原価率は、2013年度が72.2%、2014年度は95.8%であったが、池田さんが所長になった2015年8月の段階では、304%となっていた。営利企業であれば、人員整理を必要とするような経営状況である。しかし、池田所長は考えた。「なんのための仕事おこしなのか。」「仲間を守るための仕事おこしではないのか。」「仲間の力を信じて、全員で課題の一つひとつ取り組もう。」話を重ねるうちに、この想いが組合員全員の想いとなっていった。組合員一人ひとりが細かいところにまで気を配り節約に努めるようになった。一ヶ月後の9月には原価率が227%に、10月には150%にまで下がった。現在、亘理事業所は、自立事業の確立をめざして、就労施設を軸に各部門をリンクさせて活動できるように奮闘中である。

私はこの報告を聞きながら、全日自労の時代の日雇い労働者たちの合言葉「死ぬまで面倒を見合おう」を思い出した。全日自労は、労協の前身である。組合員の多くは、東日本大震災と同様に、あるいはそれ以上にひどい戦争という大災害を被り、苦しい生活を強いられていた。私は何人かの人と親しくさせていただいたが、男女を問わず、たくましく、そして優しかった。彼ら、そして彼女たちは、全日自労という労働組合に結集し、「どっこい生きている」と踏ん張り、「死ぬまで面倒を見合おう」と誓い合っていたのである。

思えば、ワーカーズコープの典型とされるモンドラゴン協同組合も「仲間を守るための

仕事おこし」として始まり、仲間を守ることで発展していった。池田所長の「仲間を守る」という言葉には、全日自労に結集した人たちのDNAとともに、世界中のワーカーズコープの人たちの想いが引き継がれていると感じた。私はここに協同労働の核心を見た。

戦争中、私はまだ子供であったが、「武士道とは死ぬことと見つけたり」という言葉をよく聞かされた。この表現になぞらえれば、「協同労働とは仲間を守ることと見つけたり」と言える。

ただし、武士道が死を見据えているのに対して、協同労働は生を見つめている。協同労働は、「どっこい生きている」「死ぬまで面倒を見合おう」という遺伝子を引き継いでいるのである。池田所長の言葉を借りれば、「仲間とともに生きる喜びを感じる」のが、協同労働である。

「武士道とは死ぬことと見つけたり」の典拠『葉隠』を読むと、この表現に続いて、「毎朝毎夕、いつも死ぬ覚悟をしていれば、武道の自在の境地に達することができる」という解説がされている。「協同労働とは仲間を守ることと見つけたり」の解説としては、「いつも仲間を守るために働く覚悟をしていれば、協同労働の核心に達することができる」と言えるかもしれない。

「仲間を守る」は、協同労働の核心である。

### 協同労働とは地域社会を守ることと見つけたり

「仲間を守る」という場合の「仲間」とは、

どの範囲の仲間をさすのであろうか。仲間には、同じ職場で働く仲間もあり、同じ趣味を持つ仲間もあり、同じ地域に住む仲間もある。

なんらかの共通性をもつ人たちの集まりを、英語ではコミュニティと言う。communityの意味を英和辞書で調べると、「生活・仕事・趣味などを同じくする人びと、地域の人びと、共同体」などと説明されている。

「仲間を守る」という場合の「仲間」とは、第一義的には、顔を知る仲間を守ることであるが、より広くとらえれば、コミュニティを守るということである。協同労働とは、仲間を守り、地位社会を守る労働である。

「守る」だけではない、積極的に言えば、「つくる」のである。協同労働とは、仲間をつくり、地域社会をつくる労働である。

地域社会だけではない。さらに言えば、協同労働は、地域社会の集合体である社会全体をつくりかえる労働である。協同労働が社会に広まれば広まるほど、社会がつくりかえられていく。

協同労働がどのように社会を変革し、どのような社会をつくりあげることになるかという問題については、富沢賢治『唯物史観と労働運動』（ミネルヴァ書房、1974年）で詳論したので、参照していただければ幸いである。

## 協同労働の基礎は コミュニケーションと見つけたり

柳生章『翻訳語成立事情』（岩波書店、

1982年）によれば、明治時代になるまで、日本にはsocietyに相当する言葉がなかった。柳生氏によれば、「societyに対応する現実が日本になかった」からである（3ページ）。福沢諭吉は、『西洋事情 外編』（1868年）で、societyを「人間交際」と訳した。東島誠氏（日本中世史研究者）は私に、「この『人間』は『じんかん』と読むのかもしれない」と示唆してくれた。「じんかん」とは「人と人の間」という意味である。とすると、社会は、人間相互のコミュニケーションから成り立つということになる。当たり前と言えば当たりのことだ。しかし、私は一歩進めて、これを、人間相互のコミュニケーションがどれだけ広く、どれだけ深くなされているかが、社会の質を定めるというように解釈したい。

よい人間関係、よい仕事、よい地域社会、よい社会をつくるためには、よいコミュニケーションが必要である。

よいコミュニケーションに不可欠なのは、ハウレンソウである。人と人の間、また組織と組織の間で、報告、連絡、相談を真摯に続けることによって、信頼関係が生まれ、約束ごとが積み重ねられ、ネットワークがつくられる。信頼、約束、ネットワークが集まってソーシャル・キャピタル（人間関係資源）となる。ソーシャル・キャピタルの蓄積が、よい人間関係、よい仕事、よい地域社会、よい社会をつくる。

ハウレンソウをたくさん食べることが協同労働を強くする。第19分散会での4報告を聞いて、そう思った。

## 死者も仲間と見つけたら

互理事業所の池田所長は、東日本大震災で亡くなった人びとへの想いを熱く語った。生き残った自分の想いを痛切に語った。「私たちはみんな被災しており、生かされた命だと思っている。生き抜かなければいけないという気持ちが、人一倍強い」という池田さんの言葉に、私も同感するところが多かった。第2次世界戦争中に多くの人びとを失った経験を持つからだ。7つ違いの私の兄は、特攻志願者養成所とも言える予科練に入った。多くの若者たちが死を強制された。彼らの想いを、生き残った私たちはどのように引き継いだらよいのか。池田所長が「生き残った自分のなすべき仕事」について語ったとき、そこには多くの死者の想いが込められていたように感じられた。そこに死者との交わり、コミュニケーションがあった。死者への想いが池田さんを突き動かしていたのかもしれない。池田さんは、もしかしたら、死者をも協同労働の仲間に入れていたのかもしれない。

かりに、すべての死者の想いを自分のものにするということになれば、それは、人類の歴史をわがものとして引き受けることになる。それはとてもかなわぬことだ。重すぎる。しかし、自分が人類の一員だと自覚することが協同労働の内実をより豊かにすることは、確かだろう。

この問題に関係すると思われるので、私が感銘を受けた小説を二つ紹介したい。スタインベックの『怒りの葡萄』とヘミングウェイ

イの『誰がために鐘は鳴る』である。

## 怒りの葡萄

1929年に始まるアメリカの大恐慌は、全土に失業と生活難をもたらした。農村地帯も例外ではなかった。『怒りの葡萄』は、その当時の農民の物語である。

オクラホマの貧農ジョード一家は苦しい旅を経てカルフォルニアに着くが、生活難が続いた。各地から集まった貧農たちを日雇いあるいは季節労働者として雇う地主たちは、意のままに賃金を切り下げた。「100万エーカーを所有する一人の地主のために10万の農民が飢えた」と記されている。

貧農を組織しようとする者は、ただちに「赤」とされ、迫害された。元・説教師のケイシーも撲殺された。ジョード家の次男トムは、ケイシーを救おうとして、警備員を殺してしまう。家族と別れ逃げることを決意したトムは、母に別れを告げる。

「ケイシーが言ったように、人間、自分だけの魂なんてものはもっちゃいねえだ、ただ大きな塊の一部分をもっているだけなのかもしれないねえ。」「つまり、おれは暗闇のどこにでもいるってことになるだ。どこにでも——おっ母さんが見さえすりゃ、どこにでもいるだ。パンを食わせろと騒ぎを起こせば、どこであろうと、その騒ぎのなかにいるだろうしね。警官が、おれたちの仲間をなぐってりゃ、そこにもおれはいるだよ。……仲間が怒って大声を出しゃ、そこにもおれはいるだろうて。……おれたちの仲間が、自分の

手で育てたものを食べ、自分の手で建てた家に住むようになれば、そのときだって、そこにもおれはいるだろうよ。わかるかい？」

「人間、自分だけの魂なんてものもっちゃいねえだ、ただ大きな塊の一部分をもっているだけなのかもしれねえ」というトムの考えは、『誰のために鐘は鳴る』の主人公ジョーダンにも引き継がれていく。

## 誰がために鐘は鳴る

私は1936年生まれである。この年、日本では2・26事件(青年将校らによるクーデター未遂事件)が起きた。スペインでは、左派の人民戦線政府に対してファシスト反乱軍が蜂起して内乱が生じた。ドイツとイタリアがファシスト反乱軍を支援したのに対して、世界の反ファシズム陣営は国際旅団を組織して人民戦線政府を支援した。多くの国から青年たちが義勇兵(ボランティア)として参加した。現地内で内乱の実態を見たヘミグウェイは、『誰がために鐘は鳴る』を書いた。主人公はアメリカから来た青年の義勇兵ロバート・ジョーダンである。ラストシーンを見よう。

橋の爆破を任務としたロバートは、ゲリラ隊に協力を求め、そこでマリアと恋に落ちる。橋を爆破したロバートは瀕死の重傷を負う。死を覚悟した彼は、敵兵を食い止めるためにただ一人現場にとどまり、仲間を逃がす。ロバートは、別れを拒否するマリアにつきのように言う。

「きみは出かけるんだ。だが、ぼくは、き

みのそばを離れない。ふたりのうちひとりがいるかぎり、ふたりともそこにいるんだ。」  
「きみが行ってくれば、そのときはぼくも行くんだ。……ふたりのうちどちらかがいるところには、いつもふたりともいるんだよ。」  
「ぼくたちふたりのために、きみは行くんだ。」  
「ぼくをよるこぼせるために行ってもらいたいんだ。」  
「いまでは、ぼくはきみでもあるんだよ。」  
「きみのなかのぼくたちふたりは、手に手をとって歩いて行くんだ。」  
「いまきみは、ぼくでもあるんだ。きみは、ぼくの未来のすべてなんだ。さあ、立つんだ。」

弔いの鐘は誰のために鳴るのか。ヘミグウェイ自身は答えていない。小説の冒頭に引用されているジョン・ダン(17世紀イギリスの詩人)の詩が答える。その大意は、つぎのようである。

人はみな孤立した島にあらず。  
一個で成り立つものにあらず。  
だれもが大陸の一部なり。  
波がその一部を洗い去れば、大陸はそれだけ失われる。  
「ゆえに問うなかれ。

誰がために弔鐘は鳴るやと。  
そは、汝のために鳴るなり。」

## むすび

亡き人の想いを引き継ぎ、歴史を直視し、仲間を守る。それが協同労働である。数かずのよい仕事が、それを私に教えてくれた。